

ある青年の死

藤田陽子

その青年は枕の上で、のけ反るようには顎を引く、深呼吸のような動作を十回ほど繰り返したあと「ふーっ」と、顎を落とし静かに息を引き取った。何かを拒否するように眉根を寄せ、口は薄く開いていた。唇を噛んでその様子を見つめていた青年の父は、「重信、苦しかったろう」と肩を震わせ、息子の頬を両手で、そっと包みこんだ。

その枕元で正座のまま、彼の最期を見守っていた私の祖父は、握りこぶしで涙を横に払った。女学生だった私は、凍りついたように祖父の背中にはりつき、息をつめ、その人が彼岸へ旅立つ瞬間を見つめていた。長崎市で原爆の洗礼をうけた青年は、二十四歳の短い生涯を閉じた。

彼の名前は「林田重信さん」と言う。

長崎市に原爆が落とされたのは、昭和二十年八月九日、午前十一時二分である。それにより、長崎市は広範囲にわたり、壊滅的な被害をうけた。その惨状を湾を挟んだ島原半島の海辺に住む私たちは、同県でありながら何も知らなかった。人々が異常に気がついたのは、その日が暮れてからである。

海をへだてた向こうの空が、赤黒く染まっているのを見た人たちが驚き、浜辺の町は騒然となった。それは、正に長崎市の上空である。異変を知った多くの住民たちが、夜の浜辺に集まり、その異様な光景に息をのんだ。

「あん空の赤かとは何やろか（あの空の赤いのは何だろう）」
大人たちが、あれこれと詮索をするが訳が分らず、やがて、皆、おし黙り赤く燃えるような空を見つめ立ちつくした。ひどく、むし暑い夜だったことを覚えている。その空の下で、万を超える人たちが、死のふちに喘ぎ、業火に追われ、水を求めて川のなかに折り重なって落ちていったという。

そんな地獄絵さながらの光景が、くり広げられていたことを、誰が想像し得たであろうか。その翌日、全身を白い包帯で巻かれ、体中が大きく腫れ、膨れ、男女の区別もつかない被災者を助手席に乗せて、当地に避難してきたトラックの運転手の口から、長崎市の惨状がもたらされたのである。

「重信さん」の生家は、のどかな山間の集落のなかにある。彼の父上と私の祖父は、兄弟のように仲の良い親友だった。幼いころ祖父に連れられ、農家である林田家へよく遊びに行った。黙々と家業を手伝う彼は、私を妹のように可愛がり、肩車をして庭中を走り回り遊んでくれる。私は「重信兄ちゃん」と呼び親しんだ。

端正な容姿を持ち、心根の優しい働き者の彼が、長崎市内のある軍需工場に働きに行った経緯は、子どもだった私は何も知らない。原爆が投下された日、重信さんは職場の休みで実家に帰っていたそうである。が、長崎市の惨状を知った真面目な彼は、その翌日、トラックなどを乗り継ぎ何時間もかけて、市内へ向かった。

そこに二泊して潰れた彼の職場である工場の後片づけを手伝い、疲れ果てて実家に帰って来たという。その三日後に戦争は終わった。

そのころから彼にひどい下痢が始まり、食事も摂れなくなった息子を案じた小父さんが、祖父に相談に来た。穏やかな海辺の町であるわが家の側には、数軒の病院がある。

「なんばしよつとかつ（何をしてるんだっ）。早う、家に連れてきて医者さんに診てもらわんかつ（医者に診てもらえっ）」珍しく祖父が気色ばんだ。

翌日の昼ごろ、木と竹で作られた急ごしらえの担架に乗せられ、上半身を少し起こした状態の重信さんが、わが家の裏庭に運ばれてきた。汗だくになった屈強な若者が五、六人と、彼の父上、小父さんがいた。十数キロの上り下りの多い山道を、若者たちが交替で担いできたのであろう。「重信さん、きつかったろう」と、祖父母が出迎えた。

私もその後ろからそっと覗いた。そのころ女学校の寄宿舎にいた私は、何年も会っていない「お兄ちゃん」が懐かしかった。が、その顔を見た瞬間、「はっ」と胸をつかれ慌て目を逸らせた。かつて、爽やかな好漢だったころの面影は消え、頬がこけ、小さくなった彼の顔は、鼻の高さばかりが目立つ土気色に変わっていた。

「重信、小父さん、小母さんお世話になりますって言わんね」と、これも憔悴した顔の小父さんが言うと、病人は弱々しく微笑み、こくと瞼を閉じた。

早速、座敷に敷かれた布団に寝かされた彼は、ぐったりと目を閉じたまま、吸い呑みのお茶を少し飲んだ。介抱のために小父さんが残った。やがて、急を聞いた医師が駆けつけたが、どんな診断がくだったのか私は知らない。

夏休みで祖父母の元にいた私は、たとえ病気であれ、子どもころから憧れていたお兄さんが、わが家にいることが気になり、落ち着かなかった。宿題も手につかず、病人と小父さんがいる座敷の閉められた襖の外を、うろろうと歩き回り祖母に目で叱られる。

ときどき私がお茶を運ぶ。「お兄さんお茶よ」「ありがとう、大きゅうなったね。もう女学生か」などと、しほりだすような声で喋り、精いっぱい笑顔を浮かべてくれた。

吸い呑みのお茶を全部、飲めたことが嬉しく「お兄さんは治るにちがいない」と信じた。

ある青年の死

毎日、午後診察に来ては首をかしげながら帰って行く医師が、ある日「ちよつといいですか」と祖父に声をかけ二人で庭の奥のほうへ行つた。

私もその後が続いたが、医師の緊迫したように異様なものを感じ、少し手前の木の陰にかくれて聞き耳をたてた。そこで、信じられないような医師の言葉を聞いたのである。「あの病人さんは、後、四、五日しか持たんと思えますよ。もう、腸が腐つとります」急きこむように祖父が開いた。「いったい、なんの病気ですか」「いやあ、私も初めて診る症状でよう分らんとですよ。覚悟だけはしといてください」と言った。

重い事実を知り全身の力がぬけた私は、木に寄りかかったまま、目の前に広がる海をぼんやりと眺めた。永遠の生と平和を謳うように、潮の満ち引きを繰り返す海に対し、人の命のはかなさを思い唇を噛みしめた。

「お兄さんが死ぬ」。衰弱が激しく、誰の問いかけにも反応しなくなった彼の病状は、もう、誰が見ても絶望的だった。その後、親子の顔を見るに忍びなくなった私は、病人がいる部屋には近づかなかつたし、祖母に用事を頼まれても行かなかつた。と、言うより行けなかつた。

何の病気が知らないが、祖母が食べさせようとするとお粥を摂ることも出来ず、少量の水しか飲めなくなつた命はもうすぐ消える。可哀そうであり、唯、虚しかった。そして、ついにその刻が来た。万物が鳴りをひそめた八月末の深夜、皆の祈りも虚しく、彼の魂はそれまでの苦しみから逃れるように、天へと昇つていったのである。

虚脱状態で、息子の側から動けない小父さんを労わりながら、祖父母が重信さんの枕元に供養の物を供えた。ローソクに灯がともされ、線香の煙が揺れた。

いつの間にか彼の顔には白い布がかけられ、祖父が低く唱える枕経で、息づまるような夜が明けた。白布をそつとめくり嗚咽しながら、土気色のまま小さくなつた息子の顔を、握りしめたタオルで拭き続ける小父さんの姿を、祖父母と私は声もなく見つめていた。翌日の昼ごろ、重信さんは、つい一週間ほど前に乗せられてきた担架に、全身をすっぽりと毛布にくるまれ寝かされた。子どものように小さく見えた。

目を真っ赤に泣き腫らし、憔悴しきつた小父さんは、担架のなかの物言わぬ息子に、「重信、小父さん、小母さん、お世話になりましたって言わんね」と呼びかけ、自ら「小父さん、小母さん、お世話になりました。有り難うございました」と、祖父母に向かい深々と頭を下げた。臉を腫らした祖父は、合わせた両の手を胸に当て大きく頷いた。

手拭を目に押し当てたまま、肩をすぼめている祖母の後ろに立っていた私は、裏の浜辺に打ち寄せる潮騒を鎮魂歌のように聴きながら、小さく手を合わせ僻いていた。

やがて、彼を乗せた担架は、若者たちに担がれ裏門から出て行き、肩を落とした小父さんを支えて祖父が同行し、祖母と私は、県道から山へ差しかかる坂道の下まで見送つた。

暑い日差しの中、乾いた坂道を揺れながら運ばれていくお兄さんを偲び、祖母は数珠をかけた手を合わせ、何ごとかを祈り続けた。

「お兄さん、さようなら」。涙目が見えないように帽子を目深にかぶり、遠ざかっていく担架を見送っていた私は、急に、祖父と一緒にお兄さんについて行きたいという衝動にかられ、皆の後を追い坂道を五、六歩かけ上った。

が、祖母を独りには出来ない。坂の途中でくると踵（きびす）を返し、訝る祖母を残したまま、わが家に向かって走りだした。

一週間の複雑に揺れた想い、体中に張りついた虚しさを振り払うように、走り続けた。走りながら見た山も、海も、視界のなかで白っぽくぼやけて、揺れて、膨らんで、頬の上をすべり落ちていったのを思い出す。

「何の悪いこともししていない息子が、業病で死んだ」と、小父さんが嘆いたと聞いたが業病などではない。まだ燻っていた工場の焼け跡を、二日間にわたり片付けた際に受けた、「二次放射能」により、若い命は奪われた。

しかし、それが「原爆症」だと判明したのは、ずっと後のことである。